

全一なる心

一。「全一」という言葉、この言ほど、言い表すことの出来ない言はない。したがって容易にわかかって来ないようである。言そのものの解決や表現は出来なくても、その意はわからなくてはならない。何故ならば、第十八願の世界、大信心の境、すなわち真実自覚の世界は、全一なる智慧の世界だからである。

一。全一な言、それは真実の自覚から出た言のことである。大無量寿経を唯一の真実教だと聖人が頂かれたのは、大無量寿経の言が世尊の正覚そのまま、正覚の本源、全一なる徳そのままが流れ出たものだからである。そして、大経においては「仏の本願を説くを経の宗致と為す。即ち仏の名号を以て経の体と為るなり。」と教巻に示されたが、名号とは全一なる徳そのものであり、本願とはその徳の大用に外ならない。その徳そのままの教えなるが故に、全一なる言教なるが故に、これを聞くものが救われるのである。

一。しかし全一な言でなければ救われないのに、人間は全一な言葉を好くであろうか。一人の人が他の人を悪んでおるとする。その時、その人は他の人にそれを語り、同情ある言葉、又は、自分に味方する言葉を求める。それが煩惱である。彼はその時に全一なものから出る言葉よりも、偏執の心に合う言葉を求めるであろう。そしてその人は、貴方こそ悪い、などと聞けば、さらに腹を立て、情のない人間、好かない人間だとして、さらに他に訴えてゆく。そうして一時の満足を求めて行っても、それは決してその人を救わないで流転せしむるのは、全一な徳の世界に出ないが故である。

全一なる言は耳に入るものではない。極難信と言われるのは、ここにもその原因があるであろう。

一。応化の仏は八万四千の教法を説いて、衆生の機を調熟せしめなくてはならない。それは衆生が全一なる声を聞いて、法喜樂を得るに至るまでには容易なことではないからである。観経において、全一なる本願の名号をその裏に隠しつつ、表には八万四千の定散二善を説かれるのは、この権仮の教えを通して、自己内観の世界につれ込み、全一なる名号の大海へ転入せしめようとせられるがためである。八万四千の諸善万行はみな徳の一片にすぎない。それは衆生の上に機の真実を打出すための方便の善である。したがって仏の随自意の教えではなくて、大悲のやむを得ずして説きたもう随他意の教えである。であるから応化の世尊は御苦勞である。まず衆生の好むところにしたがって諸善を説きつつ、静かに時機を純熟せしめて、全一なる大行の世界に帰入させて下さるのである。

一。徳の一片を以てしなければならぬ機に、全一なる徳は何等の響を与えないこと、馬の耳に風である。本願の言、十八願の世界を説かず、個々の善を説く人が一

往若人にもてはやされるのは、それが為である。しかしそれではついに救われぬ。十八願の世界において全一なる声を聞かねば、全一なる信心の智慧を生ずることは出来ないが故である。耳に入らないかの如き真実の声も、しかしながら、一度耳に入りはじめると、重い石が一切のものを圧してゆくが如く、内に内にと自覚自証をおしすすめて行つて、心内奥深く巣くうところの我の本城を滅ぼさずにはおかない。そして流転の本源をつなぐ自力の迷情の本罪を亡ぼすままに、全一なる信心の智慧を成就して下さる。無我なるこの心こそ、十方正面なる真実自覚の相である。この智慧の世界において、我が一切の心相は罪惡煩惱として内観せられる。

一。全一なる功德は、八万四千の諸善の如何なる一善でもない。したがって相對善、即ち有漏善にとどまつている人には、そんなものはない、そんな世界はないとしか考えられない。如来というものを認めない。名号だとか、尽十方無碍光如来だとか言つても、それは何にもならないものだと思つて考へるのである。しかしこうした人は、自らのなしつつありと認する善が、その本質において如何な邪惡なものを蔵しているかを知らない。全一なる大善は、いづれの善でもないが、一切の善を撰取し統融するが故に、個々の善の上に生きる時、個々の善をして全一の相において輝かしむるのである。全一の徳に撰取された時、個々の善はその体内の善となるのである。

他力真宗の世界においては、この全一なるものによつておこる心を無上菩提心と言われる。全一なる自利、そのままが利他なる心である。本願によつて、一切の我執、功利的心等を越えたる、純一無雜清淨なる心である。